九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「鍵」におけるエロティシズム : 性の具現化を中心に

吉, 美顯
日本学術振興会

https://doi.org/10.15017/16044

出版情報：Comparatio. 9, pp.58-65, 2005-07-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

「鍵」におけるエロティシズム

―性の具現化を中心に―

吉　美顯

はじめに

昭和期における谷崎には、日本回帰を試みながら、性を通した美の世界、つまり女性美から美を追求しようとする姿勢が見られる。初期や大正期の谷崎の作品には、あまり具体的な性的描写は見つからないが、「鍵」（「中央公論」一九五六・一）にはその傾向がよくうかがえる。さらに、この作品は現代的なコミュニケーションの小説として高く評価されている[一]。「鍵」の中には初期と同じ「強者」としての勝利が見えるが、性的な勝利という点が初期とは異なる。「鍵」は「過酸化マンガン水の夢」につづくものであり、更に老人の性を扱った作品として有名な「瘋癲老人日記」（「中央公論」一九六一・十一―一九六）につながるものである。谷崎が中年の性をどのように描写しているのかについて「鍵」という作品を通して検討してみる。

一　「谷崎の晩年の『鍵』がもう少しのところで現代日本文学を代表する傑作となりえたのは、それが「愛経の完成」であったからではない。でなくて、この物語が明治大正以來日本人が希求しながらも果たせなかった近代的市民のステイタスにはじめて到達した人々が展開する、真に現代的な意味におけるコミュニケーションであるからである。」森常治「コミュニケーションとしての性〈鍵〉」「国文学解釈と鑑賞谷崎潤一郎耽美の構図」（至文堂、一九七六・十）一四五頁。

一　日記による性生活の形成

「鍵」は日記形式の作品で、作品中の大学教授が死亡したのちも、その日記は郁子によって引き続き認められる。その日記では、精神的なものより、肉体的なものが大事にされ、初期や中期と同じく肉体的な女性美が重要視されている。

教授(僕)は五六才で、性的な機能は衰えているが、彼は閨房のことばかりを考えている。「僕」と郁子の夫婦関係はあまりよくない。「僕」も郁子が自分を愛していないことを知り、郁子も夫の眼鏡を外した顔をみれば、嫌悪感すら感じる。さらに、性も合わない。二人は性については、ほとんど話さないが、日記を通してコミュニケーションを続け、性生活が展開していく。つまり、日記が夫婦の性の媒介の役割になっているのである。

夫の日記は「一月一日。……僕ハ今年カラ、今日マデ日記ニ記スコトヲ躊躇シテイタヤウナ事柄ヲモ書キ留メル「ニシタ」と始まる。夫婦はたがいにそれぞれの日記が盗み読まれているのであり、ただあくまで気づかないふりをしている。二人は続けて日記を書きながら、「二重のだましあいの構造」という形式をとっている。夫婦がたがいに相手の日記を読んでいるという根拠は、夫が鍵を落したことから推測できる。妻が書斎に掃除をしに入ったときに、珍しいことに出会う。「水仙の活けてある一輪挿しの載っている書棚の前に鍵」が落ちていたのである。妻は、夫の几帳面な性格を知っていたので、落とすはずがないと考えながら、夫の意図は「私に日記を読ませる」つもりであるということに気づく。さらに、「お前が内証で読むことを僕も今日から内証で認める、認めて認めないふりをしていてやる」と夫が示唆しているように思うのである。

郁子の日記には夫が性的に「物足りなかった」ことが書かれ、夫が郁子

の性について「病的に強いけれども」、やり方が「「事務的」」であり、「「ありきたり」」で、「変化がない」と正直に書く。郁子の消極的な性の態度について僕は責めるが、郁子は、男に対して「自分の方から能動的に働きかけてはならない」と、「昔気質の親たちからしつけられて来た」という。

僕は、性の刺激剤として利用するために、妻の相手として木村を投入する。僕は木村に感じる嫉妬心による快楽を求め、これがまた、妻をも喜ばせる[二]。結局、僕は彼女の「淫乱ヲ征服出來ル」ことになる。習慣的にマンネリズムとなった夫婦関係に、第三者(木村)が登場することによって、夫婦の性生活が成功する。第三者の登場による緊張感は、僕と郁子が互いに見せ合っている日記によって人為的に作られたのである。

このように二人の性の関係に鍵の発見と木村の登場という要素が加わり、二人の性は満足されていく。夫が日記の中で木村に対して「気ガ狂フホド嫉妬」するのを望み、また木村と妻が姦通することを望んでいることを書きしるすと、妻はそれに応じて、ブランデーを飲みすぎて風呂場で気絶するなど、夫の日記に書かれたシナリオを忠実に辿っていく。ある日、妻は木村の家で、ブランデーを痛飲する。夫は妻が泥酔した理由を追及しない。教授は刺激を覚え、裸でたおれていた妻を見て興奮し、妻と木村の間に行われたことを想像して快楽を感じる[三]。夫は「第四次元ノ世界ニ突入シタ

二「僕ハソノ嫉妬ヲ密カニ享樂シツツアツタ―(中略)―元來僕ハ嫉妬ヲ感ジルトアノ方ノ衝動ガ妬ヲ利用シテ妻ヲ喜バスコ・ニ、成功シタ。僕ハ今後、我々夫婦ノ性生活ヲ満足ニ続ケテ行クタメニハ、木村ト云フ刺激剤ノ存在ガ欠クベカラザルモノデアル「ヲ知ルニ至ツタ。」

三。「昨夜ノ突然ノ事件ハ何ヲ意味スルカ、ソレヲ考ヘル・ハ恐怖ニ似タ楽シサデアツタ。僕ハマダ木村カラモ、何ノ説明モ聞イテイナイ。―(中略)―自分デ勝手ニ、コレハカウ云フ訳ナノカ、イヤサウデハナクテカウナノカト、サマザマナ場合ヲ想像シテ嫉妬ヤ憤怒ニ駆ラレテイルト、際限モナク旺盛ナ淫欲ガ

ト云フ気ガ」し、今まで「始メテ生キ甲斐ヲ見出シタ心地」であると日記に書く。妻は夫について「不器用な接吻の仕方」であると思いながら、「此の男が私のためにこんなにも夢中になつているのを知ると、彼を気が狂ふほど喜悦させてやることにも興味が持てた」と、自身も「いつの間にかその世界へ入り込んでしまふ」のを告白している。

二人の性関係が教授の健康に影響を与え、結局、彼は脳動脈硬化による脳溢血を起こす。しかし、教授は体調不良に陥っても、郁子と房事を続ける。郁子は彼の病状を知りながらも、思わず木村を「抱き締めたのと同じ力で」夫を強く抱く。数分間後、夫は妻の体の上に崩れ落ちる。結局、教授は入院し、二回ほど発作を起した後、死んでしまう。

郁子の日記は、夫が死ぬ前日で終わっている。教授が死ぬまではいろいろ刺激的な出来事があったが、「彼の死の結果として、さしあたり先を書き続く興味」がなくなったからである。同時期に始まった二人の日記において、教授と妻は「代るゝ語るところを対比して見」ながら、その間に洩れているところがあれば、補っていく。日記によって、二人がいかに「愛し合ひ」、「欺き合ひ」、「陥れ合ひ」ながら、「一方が一方に滅ぼされるに至つたかのいきさつ」が確認されるが、教授が死んでからは、性の緊張感や「秘密主義」がもたらす快楽が消えるため、日記を書く意味がなくなるのである。それは、二人の「性生活の闘争」の終焉を意味する。郁子が日記を書く理由は、彼女が生まれつき淫乱で、夫が「私の旺盛な欲求に十分な満足を与へて」くれなかったため、夫の体力の減退を心配しながらも、「一層愛情を募らせ」るためであった。郁子は夫の死後は新しい日記を書くのでは

発酵シテ來ル。事実ヲハツキリ突キ止メテシマフト却ツテサウ云フ快感ガ消エル。」

なく、前に書いた日記を読みながら、虚構の世界を書き加える。

二　「死に至るまで」のマゾヒズムとサディズム

谷崎の作品には、マゾヒズムとサディズムの要素が頻出する[四]。「鍵」においては女性の中に潜在的に存在しているマゾヒズムが、男性によって人為的に呼び起こされる。また、この作品には、性的な満足の過度の追求から発生する神経症の描写も見られる。

木村が帰った後、教授は妻のベッドに近より、「フローアスタンドヲ静カニ妻ノ寝台ノ側近クニ寄セテ、彼女ノ全身ガ明ルイ光ノ中ニ這入ルヤウナ位置」に据えた。さらに書斎から蛍光灯を持ってきて妻の裸体を照らし、宿願であったその女体を観察する[五]。この日のことを待ち望んでいた教授は、妻の全裸の隅々まで見るのは初めてであった。教授は妻の体の美しさに感嘆し、それを神格化するに至る。

教授は妻の体を観察しながら、「情欲ヲ掻キ立テタ」後だったので、「相当強力ニ、彼女ノ淫乱ヲ征服」することができた。教授はこれからも頻繁にこのような快楽や征服感を感じるため、彼女を「悪酔ヒ」させるつもりであった。

妻がブランデーを飲んで、幻覚の世界に落ちると、教授はそれを利用し、自分も妻の体に耽溺することによって、幻想の世界に入り込む。このような教授の行動形態からは、サディズムだけではなく、神経症さえ感じられる。神経症の人間は「人とは異なる発想や想像力や表現能力」と「病的な性格」[六]をもっていることが多いとされる。教授は異常なまでの想像力と病的な性格をもって以前から計画通り、奇矯な行動を展開する。そして官能と神経の興奮によって、以前よりさらに、激しい情欲の世界にのめりこんでいく。

一方、妻の方は泥酔しているものの、意識は失っておらず狸寝入りをしているに過ぎない[七]。彼女の方も、今まで経験しなかったような強烈な恍惚感をおぼえる気持ちであった。そして、「突然自分が肉体的な鋭い痛苦と悦楽との頂天に達していたこと」に気づく。このように女性の中の潜在的な官能が教育によって呼び起こされる場面は初期作品から度々描かれる。女性を教育によって「幻覚」に至らしめる場面は「捨てられる迄」（「中央公論」一九一四・一）、「白昼鬼語」（「東京日日新聞」一九一八・五・二十

四　初期作品「刺青」におけるこれらの要素については、博士論文第一章第十二節参照。

五　「イツカハ蛍光灯ノ明リノ下ニ妻ノ全裸体ヲ曝シテ見タイト云フ欲望ニ燃エテヰタノダツタ。コノ・ハ蛍光ト云フモノノ存在ヲ知ツタ・カラノ妄想ダツタノダ。……スベテハ予期ノ如クニ行ツタ。僕ハモウ一度彼女ノ衣類ヲ全部、何カラ何マデ彼女ガ身ニ纏ツテヰルモノヲ悉ク剥ギ取リ、素ツ裸ニシテ仰向カセ、蛍光灯トフローアスタンドノ白日ノ下ニ横タヘタ。ソシテ地図ヲ調ベルヤウニ詳細ニ彼女ヲ調ベ始メタ。僕ハ先ヅソノ一点ノ汚レモナイ素晴ラシイ裸身ヲ眼ノ前ニシタ・ニ暫クハ全ク度ヲ失ツテ呆然トサセラレテイタ。」

六　吉田城『神経症者のいる文学―バルザックからプルーストまで―』（名古屋大学出版社、一九九六・七）三頁。

七　「私は彼があまり猛烈に腋の下を吸いつづけるので、ハツとして或る一瞬間意識を回復した時があつた。――彼がその動作に熱中し過ぎて掛けていた眼鏡を落としたのが、わたしの脇腹の上に落ちてヒヤリとしたので、途端に私は眼を覚ましたのだつた。――私は体ぢゆうの衣類を全部キレイに剥ぎ取られ、一糸も纏はぬ姿にされて仰向けに臥かされ、フローアスタンドと、枕元の蛍光灯のスタンドとが青白い圏を描いている中に曝されていた。―（中略）―半醒半睡の状態に入つたのだ。」

三〜七・十）にも見える。

彼は彼の女の肉体と霊魂とを土台にして、其処に自分の幻覚を表現させようと努めて居る。つまり、彼の女を能う限り非自然的な、非現実的な、非習慣的な、若しくは演劇的な性格に作り上げる事が、差しあたっての彼の仕事なのである。

「捨てられる迄」の主人公は女性の中のマゾヒズムの特性を呼び起こそうとした。このような行為の「マゾヒズム的操作の人工性」と「演劇的特質」はクラフト＝エービングの「創作原理と密接なつながり」があるとされる[八]。

主人公がマゾヒズムを通して幻想的な世界を味わう場面は「白昼鬼語」にも見られる。殺人願望の虜となる園村は「現実の女性に飽き足らないで幻像を恋い慕う人間」として描写される。演劇的な人工性のマゾヒズムがよくうかがえる作品は、「日本に於けるクリップン事件」（「文芸春秋」（一九二七・一）である[九]。この作の主人公と「鍵」の教授のマゾヒズムに共通する戦略は演技である。マゾヒストは相手の奴隷になるのではなく、そうなるふりをするに過ぎない。

ポラロイドを使って教授は妻の裸体の各部分を詳細に撮る。教授がそうするのは、一つは、「女体ヲ自由ニ動カシテ種々ナ姿態ヲ作ツテ」みることに愉悦を感じるからであり、一つは、自分がどれくらい妻の体を見たがっているかということをそれとなく知らせ、彼女が「何処マデシラヲ切ツテイラレルカヲ試シテヤリタイ」からである。妻は夫の日記帳に張られた写真を見て、夫が写真を撮る現場を想像して快楽を感じるのである。

ジョルジュ・バタイユはエロティシズムについて、死の不安の中での性行為が喜びを呼び起こすことを述べている[一〇]。エロティシズムは「〈死〉を聖化したかたちで置いてそれを象徴的に踏みこえようとするような」[一一]行為として存在する。このバタイユの考えを応用すると、教授の欲望の根底には無意識ではあれ死を乗り越えようとするエロティシズムがあると考えることもできる。教授は実際は、死を越えたわけではない。彼の性への欲望は死を超越しようとする幻想的な欲望なのである。このような欲望は他者（妻）との関係から発生する。彼は「自分と他者との間の相克的な欲

八　井上健「谷崎潤一郎の世紀末」、松村昌家編『谷崎潤一郎と世紀末』（思文閣出版、二〇〇二・四）一七頁。

九　「つまりマゾヒストは、実際に女の奴隷になるのでなく、そう見えるのを喜ぶのである。見える以上に、ほんとうに奴隷にされたらば、彼等は迷惑するのである。―（中略）―彼等は彼等の妻や情婦を、女神の如く崇拝し、暴君の如く仰ぎ見ているようであつて、その真相は彼等の特殊なる性欲に愉悦を与る一つの人形、一つの器具としているのである。人形であり器具であるからして、飽きの來るも当然であり、より良き人形、より良き器具に出遇つた場合には、その方を使ひたくなるでもあらう。芝居や狂言はいつも同じ所作を演じたのでは面白くない。」

一〇　「性的な無秩序に結びついた基本的な不安は死を意味する―（中略）―一方では、肉の痙攣の刺激が高まれば高まるほど衰弱は近くなり、他方では、衰弱が余裕さえ残せば快楽を助長する。死の不安は必ずしも悦楽に傾くわけではないが、悦楽は死の不安のなかで、一層甚だしくなるのである。」ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』（渋澤龍彦訳）、（二見書房、一九七三・四）一五一頁。

一一　竹田青嗣「バタイユの〈死〉の乗り越え」『現代思想の冒険』（毎日新聞社、一九八五・四）二一四頁。

望の関係」一二において、妻の官能的な体に耽溺する。永井荷風が谷崎文学の特質として「肉体的恐怖から生ずる神秘幽玄」一三をあげているのは周知の通りである。谷崎初期作品に対する荷風のこの評言はどのように解釈したものかとまどうが、最晩年の作品に先鋭的にあらわれた谷崎の特質に着目し、バタイユの考え方と結び付けることで少しわかりやすくなるように思われる。教授は妻との肉体関係から死という不安を感じるが、その世界の中で官能的な快楽は一層甚だしくなるのである。エロティシズムと死の恐怖を関連づけた教授は「死にまで至る生の称揚」一四を続けるエロティシズムを実践しているのだといえよう。

三　強者の誕生による弱者の死

谷崎の作品の中で死を扱った作品はあまりない。その中で、官能の追求の結果、死にいたる作品は、「金色の死」（「東京朝日新聞」一九一四・十二・四～十七）と「卍」（「改造」一九二八・三～一九二九・四、六～十、十二～一九三〇・一、四）があげられる。ところが、「鍵」の死の意味はそれらとは異なる。「金色の死」と「卍」は自殺に近い死であるが、「鍵」は、女性のマゾヒズムが引き起こした死である。また、教授が死に至る契機は郁子の強者としての誕生に由来している。

無味乾燥な夫婦の性生活はしだいに積極的になるが、その動機にはいろいろなことが挙げられる。その中でも代表的なのは木村という人物の出現である。木村の登場は、二人の性関係が改善する契機となる。ある夜、夫婦の関係中、妻は「木村サン木村サン」と訴えるような、叫ぶような声で木村の名を呼んだ。教授はその妻の声を聞いてさらに興奮する。妻が夫との関係中に木村の名を呼ぶ理由は、「コレモ矢張アナタヲ嫉妬サセテ刺激ヲ与ヘル手段ナノデス」という夫に対する思いやりの気持ちを伝え、逆説的に、「私ハドンナ場合デモ常ニ夫ニ忠質ナル妻デアル以外ノ何者デモアリマセン」という意味を表すためかもしれない。

教授は、妻を「カヤウニ大胆ナ、積極的ナ女性ニ変ヘタノハ」木村であると考え、木村に感謝する。教授は十年の間妻の「攻撃ニ圧倒サレツヅケテイタ意気地ナシノ夫」であったが、俄かに木村の登場によって、「不思議ナクライ旺盛ナ欲望ニ駆ラレテ」いる。今まで妻から圧倒されていた性の関係が、それ以後は教授の方が主導権をもつようになる。それに反して、性について圧倒的な迫力をもっていた妻は、受け身になって、教授から激しい刺激を受け、性関係において絶頂に至るまでになる。教授は木村によって妻を征服することができたのである。教授は妻を征服することによって、倦怠期を過ぎて、「新シイ結婚ヲ始メルノト同ジダ」と考えた。教授はこのような幸福感は感じたことがなかった。

ところが、四月十三日の教授の日記を見ると、予期以上に積極的な妻の一面を発見して驚き、教授は完全に彼女に対して受け身になってしまった一五。妻の積極性が見えてから、教授は一日中妻とのセックスのことばかり

一二　同書、二三二頁。

一三　永井荷風「谷崎潤一郎氏の作品」「三田文学」第二巻第十一号、（明治四十四・十一）一五二頁。

一四　ジョルジュ・バタイユ『エロティシズム』（渋澤龍彦訳）、（二見書房、一九七三・四）一六頁。

一五　「房中ニ於ケル彼女ノ態度、取リ扱ヒブリ、アシラヒ方、等々ニ間然スベキトコロハナカツタ。媚ビノ呈シ方、陶酔ヘノ導キ方、　々ニエクスタシーヘ引キ上ゲテ行ク技巧ノ階段、スベテハ彼女ガソノ行為ニ渾身ヲ打チ込ンデイル証拠デアツタ。」

考えている[一六]。妻は自分に夢中になっている夫を「気が狂うほど喜悦させてやることにも興味」を持つことができた。妻は教授を歓喜の世界へ連れて行ってやることで「自分自身も亦いつの間にかその世界へ」入り込んでしまったのである。

性の主導権をもっていた教授は、いつの間にかそれを妻に譲りたいと思うようになる。そして、妻の方が主導権を取ることによって、最後に教授は亡くなるのである。妻の主導的な立場が誕生したきっかけはやはり木村との密接な身体の接触によるものと理解してもいいだろう。妻は教授の教育と木村の登場によって、強者として誕生したと見られる。

彼女は今までの旧式の道徳観の仮面を捨てて、性の関係にも積極的になり、主導権を握るようになった。彼女のもう一つの計画は、教授を早く死に至らせるために、自分自身は病気にもかかっていないのに、結核病が第二期に及んでいると書いた。これは全部、郁子が作った虚構であった。

あれから、郁子は夫の死だけを考え、さらに、その目的として日記を書いた。彼女は結局、教授を「息ふ暇もなく、興奮させ、その血圧を絶えず上衝させることに」懸命した。妻は一度夫が発作したにもかかわらず、「手を緩めずに、彼を嫉妬させるべく小細工を弄しつづけた」のである。妻の体質には淫湯の血が流れているので、夫の死を計画したのかもしれないが、強者として誕生した上に夫を死に致らせる決心をしたのである。妻も自分自身は、「本來は恐ろしい心の持ち主だった」が、封建的な女性として見えたのは、家の環境のせいだと言っている。

一六　「(夫は私を世にも稀なる淫婦であるやうに云ふけれども、私に云はせれば、夫ぐらい絶えず欲望に絶え切つている男はいない。朝から晩まで、どんな時でも夫はいつもあのことばかり考えていて、―(後略)―)

妻は本来悪魔的な女性だったが、時代や家の環境で受動的な立場をとった。ところが、木村と教授によって性に目覚めた後からは、それを全部投げ出して、男性(夫)を征服する。さらに彼女が悪魔的な女性であるということを裏付けるのは、自身は亡くなった夫に「忠実を尽くしたことになる」と、「夫は彼の希望通りの幸福な生涯を送つた」と言っている部分である。そして彼女は強者として出現してからは、日記を書かなくなったのである。

四　「鍵」と「さかしま」に見える神経症

ユイスマンス(Joris-Karl Huysmans)「さかしま」(A Rebours, 一八八四)の主人公デ・ゼッサントは、ポー(Edgar・Poe)やボードレール(Charles Baudelaire)のデカダン的な美の世界に興味をもっていた。ポーの詩はデ・ゼッサントの神経を刺激する手段であり、「人工の樂園」を作り上げたとき、彼はボードレールの詩を絵の額の裏に貼っておいた[一七]。このようなデ・ゼッサントの行為は神経症によるものであった。

快楽の神経症という現象が谷崎の作品「鍵」にも現れているということに注目したい。以下、両作品に現れている人物の神経症の類似点と差異について述べてみたい。

デ・ゼッサントは最初から典型的な神経症者として登場し、精神の傾向が倒錯的で、快樂を追求しながら、「異常な愛、変った快樂」に心酔してい

一七　「この男の肖像には、衰弱化した体質の欠陥と、血液中における淋巴腺の優勢とが、すでに覆いがたくあらわれていた。この古い家系の頽廃は、疑いもなく、着々とその経過をたどっているのであった。―(中略)―デ・ゼッサント家の人々は、二百年のあいだ、彼らの余力を近親交配に集中し、自分たちの子供同士を互いに結婚させていたのである。」『渋澤龍彦訳全集7』(河出書房新社、一九九七・五・十二)九～十頁。

く。その結果、彼は神経症の治療のためにパリを遠く離れたところで隠遁生活を送ることとなる。彼の隠遁生活は、洗練された不思議な生活である。その日常生活を支配するのは彼の神経症である。モローやルドンの絵画に対する趣味、珍しいコレクション、頽廃期ラテン文学やフランス象徴派への傾倒、リキュールや香水で演出された生活、つまり「完全脱俗マニュアル」的な性向がデ・ゼッサントの神経症である[一八]。デ・ゼッサントは自分ひとりで過去の快楽の生活にふけるが、「鍵」の教授は、他の人物を介入させて、人間関係から発生する嫉妬心から変態的に快楽を引き出す。

教授は「身心ニ或ル種ノ異状ヲ來タシツツアル」ような気がするが、それは「大シタ「デモナイノイローゼニ過ギナイ」と思っていた。妻を征服するために、博士と相談して「月ニ一回男性ホルモンノデポ」を使用したが、それでは足りないと思い、「脳下垂体前葉ホルモンノ五百単位ヲ三日カ四日オキニ注射」していた。教授は、性に対してノイローゼにかかっているといってよい。教授のノイローゼの促進剤は、嫉妬から発生する激しい情熱、妻の裸体をみることによる、もえさかる性の衝動などをあげることができるが、これらによって、教授は狂気に導かれていく。このような狂気によって、教授は「法悦境ニ浸リツツア」りながらも、体は衰え、視覚に異状が起こり、事物が二重に見える。

デ・ゼッサントの神経症は、教授と多少異なるところがある。教授の神経症は、生まれつきのものではなく、夫婦の性関係から発生する後天的なものである。デ・ゼッサントの場合は家系からその傾向がうかがえる。デ・ゼッサントの母親も、「光や物音に対しても必ず神経症の発作を起さずにいられなかった。このような傾向のために、母親は早く亡くなり、父の死後、デ・ゼッサントは相続した財産で裕福な生活を送る。彼は貧血、神経症さらに、頚部リンパ節結核を患っている。そのような状況の中で、摂生と治療に励み、「洗練された隠遁の地、心地よき無人の境、人間的愚かしさの絶えざる氾濫を遠く逃れた、びくとも動かぬ、なまぬるい箱船を夢みつつ」あった。彼は情熱的な女だけに興味をもち、気まぐれな男の情欲をもって、「肉の饗宴を追い求め」るが、その情熱はすぐ消え失せ、倦怠を感じると情婦にはけぐちを求め、その結果、体はひどく衰弱し、神経系統は異常に鋭敏になる。彼は人工的な楽園を作り、デカタン的な生活を送るが、そのために以前に増して神経過敏になるという悪循環に陥る。「鍵」の教授にとって人工的な楽園とは日記という空間である。デ・ゼッサントは隠遁の生活の中で人工的な天国を発見した。

デ・ゼッサントの神経症のもう一つの特異点は、悪魔的な頽廃によって友人や少年を堕落させ、そこから快楽を感じとることである。このような異常な現象をユイスマンスは「神経症のなせる業」[一九]だと考えていた。同様の傾向は教授にも見られる。教授は妻を堕落させて、性の快楽を味わい、妻もその堕落にのめり込んでいく。ところが、デ・ゼッサントの意図と同じように完全に堕落させられない。

二作の主人公は、神経症による男性の堕落、淫蕩で悪魔的な要素を持つという点で共通しているが、谷崎が描く神経症は、結局女から征服されるのである。官能の世界を追求する「鍵」の教授の神経症と神経症が文学に影響を与えると考えているユイスマンスの作品である「さかしま」のデ・ゼッサントには類似点が窺える。ところが、神経症で死に至る教授と、治療

一八　吉田城『神経症者のいる文学―バルザックからプルーストまで―』（名古屋大学出版会、一九九六・七）一四三頁。

一九　同書、一五〇頁。

のために田舎からパリに戻っていくデ・ゼッサントとは多少差があると思われる。

デ・ゼッサントの神経症は家系や環境によって形作られたものであったが、谷崎の場合は男性の神経症による女性の勝利、つまり男性を征服する強者の誕生を試みたことに二人の神経症の差があることに注目したい。

結論

昭和期の谷崎の「鍵」は、中年の性の問題を取り上げ、「強者としての」美意識を描いている。衰えゆく性を回復させたいと願う「鍵」の主人公のために、マゾヒズムであった妻はサディストに変貌し、不能の教授を励まして、夫婦もろとも性の深淵に沈む。妻は最初自分の豊満な肉体の内に眠っている淫婦性に気づいていなかった。主人公の大学教授は妻に性の喜びを与えるため、未開発の肉体を掘り起こす。このように、男性によって女性の肉体は開発される。そして教授は開発された妻の肉体の魅力に溺れこみ、妻の肉体の上で二度目の卒中を起こして死ぬ。ここにおいて、エロティシズムの果ては死となり、その死への案内役を女性が担う。

このように、谷崎の男性主人公たちは、明治から昭和まで役割が変わらず、女性が意識していない「悪」を、身体を通して認識させ、悪魔的な女性に変化した女性の前で跪くというパターンを繰り返す。ところが、昭和期の谷崎は中年の性の描写によって、「強者として」の美意識を具現化したことに注目したい。また、「鍵」は男性の教育による女性サディストへの変貌という点では初期作品と似ているが、バタイユを想起させる性と死の関連は新しい構図である。結局、谷崎の登場人物は、限りある人生において「享楽」を重視し、それに身をゆだねることで、死を忘れ、人生の果かなさを忘れようとしているとも言えるだろう。